

「学習成果をどう評価するか？ — 評価課題とルーブリックの開発 —」に向けた論点整理（その1）

No.	関西大学GP(レポート評価)	関西大学(プレゼンテーション評価)	新潟大学(レポート評価)	
1	取組の単位 (機関、部局、科目など)	機関レベル	機関レベル	
2	対象としたプログラムや科目 (名称、必修／選択、対象学年など)	<ul style="list-style-type: none"> ・知のナビゲーター、選択必修、文学部1年生(履修者162名) ・文章力をみがく、選択、全学部主に1年生(履修者118名) ・導入ゼミ、選択、政策創造学部1年生(履修者15名) ・基礎研究1、必修、社会学部1年生(履修者51名) ・入門演習、必修、社会学部1年生(履修者330名) ・基礎演習、必修、社会学部2年生(履修者300名) ・専修フランス語(二)a、選択、文学部3年生(履修者9名) ・フランス学総合研究a、選択、文学部4年生(履修者7名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタディ・スキルゼミ(プレゼンテーション)、選択、主に1年生(履修者80名) ・入門演習、必修、社会学部1年生(履修者330名) ・基礎演習、必修、社会学部2年生(履修者300名) ・基礎演習、必修、社会学部、2年生(履修者16名) ※以下では、上記の「基礎演習」(社会学部)を事例として取り扱う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学学習法、必修、歯学部歯学科および口腔生命福祉学科1年生(学生数は両学科で60名)
3	補助金 (学内外の競争的資金など)	平成24年度採択文部科学省大学間連携共同教育推進事業「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」	平成26年度採択文部科学省大学教育再生加速プログラム「21世紀を生き抜く考動人〈Lifelong Active Learner〉の育成」	
4	学習目標 (どんな知識や能力を評価しようとしているか)	アカデミック・ライティング力(論理的思考力、情報収集力、文章構成力、文章表現力、学術的な作法)	アカデミックスキル(文献のまとめ力、プレゼンテーション力、質疑応答、議論の仕方)	
5	評価のデザイン1 (学習目標はどのように設定したか)	学士課程教育の質的転換と有為な人材育成のために欠かせない〈考え、表現し、発信する力〉の育成をめざし、ライティング力の向上を客観的に測る評価指標の作成・活用、および自己の学びをふりかえる自己評価指標の作成・活用を設定した。	学士課程教育に対する基本的認識を踏まえ、学部教育目標に基づき、アカデミックスキルの習得を学習目標として設定した。	
6	評価課題 (どんな評価課題を用いているか) * 資料添付	レポート*	プレゼンテーション*	
7	評価のデザイン2 (評価課題はどのように作成したか)	授業担当者が作成	授業担当者が作成	
8	ルーブリック (どんなルーブリックを用いているか) * 資料添付	ライティング・ルーブリック*	プレゼンテーション・ルーブリック*	
9	ルーブリックの使い方 (提示の時期、学生の自己評価・ピア評価や教員による評価など)	<ul style="list-style-type: none"> ・ルーブリック提示は、①授業内容がルーブリックの観点と重なる回、②レポート課題を学生に提示する回、③レポート提出後に学生同士で推敲する回の3パターンを設定した。 ・評価は、①学生の自己評価、②学生同士のピア評価、③教員による評価のいずれか、もしくは複数の方法で行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで持ち寄った書評をとりまとめ、その内容を学生に発表をさせる際、ルーブリックも提示する。発表終了後、ルーブリックにしたがって他グループを評価するよう学生に指示する(ピア評価)。なお採点後には、各グループに即時に返却する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・レポート課題を学生に提示する際に、同時にルーブリックも提示する。レポート提出時にルーブリックにしたがって自己評価するよう学生に指示するとともに、教員による評価に使用している。
10	評価のデザイン3 (ルーブリックの観点やレベル、記述語はどのように設定したか)	<ul style="list-style-type: none"> ・サンプルレポート(文系上位・文系下位・理系上位年次より提供された7種類、計30本)をもとに、アカデミック・ライティングに必要な観点を抽出した。 ・その後、対象を初年次生・文系・2000字程度の論証型レポートに絞り込み、サンプルレポート(文系下位年次1種類、計10本)をもとに、授業担当者1名とライティングラボ教員3名の合議により観点、レベル、記述語を設定した。 ・作成者および作成者以外の教員4名によるサンプルレポートの評価の分析を経て、観点、レベル、記述語の改善を行った。観点は、当初の7観点から6観点到、レベルは、5レベルから4レベルに変更した。 ・レベルの定義と記述語にかんしてはガイドラインを設けた。 ・記述語にかんしては、各レベルの差異を明確にするため、曖昧な表現(解釈が多岐にわたるものとして、例えば副詞など)をなるべく排除した。また、観点の一部は、記述語によるレベル分けが困難であったことから、チェックリスト形式を採用した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・導入教育のテキスト「知のナビゲーター」(中澤・森・本村、2007)を参考に観点を設定した。 ・レベルの定義と記述語についてはガイドラインを設けた。レベル数は4とし、3レベルを到達すべき目標としている。 ・記述語は、各レベルの差異を明確にするため、曖昧な表現(解釈が多岐にわたるものとして、例えば副詞など)をなるべく排除した。また、学生の理解が容易となるように可能な限り平易な用語で記している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・問題解決能力、論理的思考力、文章表現力に対応する観点を、「論理のしくみ図」(牧野、2008)他を参考に設定した。 ・レベル数は評価の信頼性分析をもとに、当初の3レベルから現在は4レベルとしている。長期的ルーブリックとし、記述語に関しては、最高レベルを卒業時に求められるレベルとして記述している。各レベルの差異は、副詞を用いて量的に、あるいは項目を追加するなど数的に表している。
11	その他の評価手段 (直接評価の課題以外にどんな評価手段を用いたか。例えば、質問紙など)	<ul style="list-style-type: none"> ・ピア評価用として、ピアレビューふりかえりシートを用意した。シートでは、自己評価およびピア評価とともに観点ごとに評価の詳細を記入できる欄を設け、レポート推敲時に参照できるよう設定した。 ・ルーブリックの改善を目的とした学生にたいする質問紙調査を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ルーブリックで提示した観点以外に、優れた点があると思われる場合、その点についてルーブリックの欄外に記述させている。 ・毎回授業の後にプレゼンテーションの感想を記述させる。それらを学期末に学生に個々に全て返却し、自己評価を促している。 ・ルーブリックの改善を目的とした学生に対する質問紙調査を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・CLQ (Course Learning Questionnaire: 授業用学習質問紙)を開発・実施している。
12	評価手段の併用・統合 (複数の評価手段をどのように組み合わせているか)			
13	評価結果の収集・分析 (評価結果をどのように収集し、分析しているか)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業における評価は、各担当教員に一任している。 ・提出レポートとルーブリックの他、ピアレビューふりかえりシートなどを学期終了後に収集し、ルーブリック作成者であるライティングラボ教員3名によりレポートを評価し、学修効果を分析している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業における評価は、各担当教員に一任している。 ・基礎集計を授業研究者が算出し、アンケート結果・授業記録報告書をもとに授業担当者にフィードバックし、学習の効果について分析・議論している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価者4名でレポートを評価し、その結果から評価者間信頼性を分析している。
14	評価結果の活用 (評価結果を学習指導や教育改善にどう活かしているか)	<ul style="list-style-type: none"> ・学生指導では、学生同士のピア評価で活用した。 ・教育改善では、回収したルーブリックを授業のふりかえりに活かすとともに、翌週以降の授業内容に反映した。 ・質問紙調査における自由記述などをもとに、ルーブリックの改善を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生指導では、学生同士のピア評価で活用した。授業終了時に、ルーブリックの評価結果を学生にフィードバックしている。ただし、授業時間の関係から、十分な指導は行えていない。 ・教育改善では、ルーブリックの改善を検討している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育内容が多く、授業時間の関係から、現状では、評価結果を学生指導に活用する時間が確保できていない。 ・新たに第2学年に「大学学習法Ⅱ」を設けて、そこで、第1学年での「大学学習法」の評価結果をふまえた発展学習を行わせることを計画中である。
15	評価結果と成績評価との関係 (評価結果を成績評価にどのように反映しているか)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の評価方法は、各担当教員に一任する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・形成的評価として扱うため、評価結果は成績評価には反映しない。(評価の基準は、発表・プレゼンテーションの内容、ディスカッションの参加状況、レポートの内容で総合評価する。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・成績評価は、プレゼンテーション40点＋ルーブリック得点/18×60点としている。これは、初年次では、少なくとも6観点レベル1に達することが望まれ、6/18×60=20点を最低限のラインとしているためである。 ・プレゼンテーションとレポートの合計点が60点に満たない場合でも単位認定している。これは、ただ1本のレポートから能力を解釈することに慎重であるべきとの考えからである。
16	評価の主体 (評価のデザイン・実施・分析は誰が行ったか) * それぞれに異なる場合は分けて書く	<ul style="list-style-type: none"> ・評価のデザイン・分析・・・ライティングラボ ・評価の実施・・・授業担当者、学生による自己評価・ピア評価 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価のデザイン・分析・・・授業担当者と研究協力者 ・評価の実施・・・学生による自己評価、ピア評価 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価のデザイン・分析・・・授業担当者と研究協力者 ・評価の実施・・・授業担当者(全員)、一部、学生も自己評価に参加
17	学生の参加 (学生は評価にどのような形で関わっているか)	<ul style="list-style-type: none"> ・レポート推敲時にルーブリックを使用。(各クラス共通) ・クラスによっては、レポート提出時に、ルーブリックによる自己評価結果を併せて提出させている。 ・ピア評価を行うクラスでは、ピアレビューふりかえりシートに記入し、自身の推敲時に活用させている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーションをピアレビューさせる際に、グループ間で相互評価させている。(評価は個人単位ではなくグループ単位で行う。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・レポート提出時に、ルーブリックにより、各観点の到達レベルを自己評価させている。
18	評価のための研修 (評価をうまく行うためにどんな研修を行っているか)	<ul style="list-style-type: none"> ・教員向けには、ルーブリックの概要と活用に関するFDを開いた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員向けには、ルーブリックの概要と活用に関するFDを開いた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・レポート評価前に評価者が集まり(あるいはメールにて)、評価基準について話し合っている(キャリアレーション)。
19	評価における困難 (評価においてどのような困難に直面しているか)	<ul style="list-style-type: none"> ・レベル間の差異の明確化。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題自体の評価とそれを改善に結びつける時間的余裕が十分にとれない。 ・ルーブリック評価を行う課題を少し増やしたいが、少人数とはいえ、それを行うことは現状では負担が大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価を繰り返しても評価者間信頼性が一定以上は向上しない(0.7の壁)。 ・長期的ルーブリックとして開発したが、歯学部では、初年次の「大学学習法」以外にレポート作成指導をする授業がない。 ・教員の評価負担が大きい。
20	今後検討したい課題 (評価に関してどのような課題が残されているか)	<ul style="list-style-type: none"> ・レベル間の差異の明確化。 ・チェックリスト形式にした部分の改善。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員の教育理念や信念を踏まえた評価観点のカスタマイズのシステムである「ルーブリック観点バンク」の設置を検討している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習成果向上のためには、評価結果のフィードバックと個別学習指導が求められる。今後、第2学年に「大学学習法Ⅱ」を開講する予定である。
21	取組の成果の公開方法 (取組の成果をどのような形で公開する予定か)	学会発表、論文、報告書の形で公開(一部公開済)	学会発表、論文、報告書の形で公開	学会発表、論文、単行本の一部、講演の形で公開(一部公開済)
22	その他あるいは問題点 (以上で漏れていることがあれば)		<ul style="list-style-type: none"> ・モデルとなるパフォーマンスの提示方法の工夫 ・課題自体の評価とそれを改善に結びつける時間的余裕の確保 ・学生自身の評価能力の涵養 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価と指導が結びついていない。 ・長期的ルーブリックとして開発したが、歯学部では、初年次の「大学学習法」以外にレポート作成指導をする授業がない。

「学習成果をどう評価するか？ — 評価課題とルーブリックの開発 —」に向けた論点整理（その2）

No.	新潟大学(PBL評価)	山口大学	名古屋商科大学	山形大学
1	科目レベル(学科必修)	科目レベル(全学必修)	科目レベル(全学必修)	科目レベル
2	PBL(Problem-Based Learning)テュートリアル、必修、歯学部口腔生命福祉学科2年生および3年生(1学年の学生数20~30名)	共通教育科目『山口と世界』(全学必修、1年生(約2,000名規模)、1クラスは約40名規模)	VPS(Vision Planning Seminar)、全学部・初年次全員・履修指定。	「フィールドワーク—共生の森もがみ」(選択) 対象:主に1年次生(毎年、約200名が受講)
3	新潟大学組織的教育プロジェクト経費	文部科学省・大学教育再生加速プログラム(AP)	文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」(H24-H26)	基本的には学内の通常経費。H18~H20 現代GP採択。H24~H28 大学間連携共同教育推進事業採択。
4	統合された深い知識・理解、問題解決能力、対人関係能力	問題発見能力・情報収集力・協調力・企画力・プレゼンテーション能力	8分野16項目のAoL(Assurance of Learning)のうち3項目(当初は任意。後に①自己分析、②将来希望、③結びつけ)	「課題発見能力」「課題探求能力」「コミュニケーション能力」「プレゼンテーション能力」「行動力」「社会性」の基礎的な力
5	学士課程教育に対する基本的認識のもと、問題解決能力の育成を学習目標の中心に設定した。	大学全体の教育理念や『山口と世界』の一般目標を基礎に据えながら、課題探求型アクティブ・ラーニング中心の初年次教育科目として適切な学習目標を設定した。	・本ゼミ(2-4年次)との連動を見据え、キャリアと卒業論文作成スキルの両方を包含させるように設定した。	学士課程教育および基盤教育の目標をふまえ、現地体験型学習の特徴を活かす学習目標の設定を行った。
6	シナリオ*	プレゼンテーション資料などを主とした学修成果作品	概して「未来の履歴書」のレポート作成。その具体的な課題だしのあり方は担当教員ごとに異なる。*	「現地での振り返りレポート」「現地講師の評価をもとにした大学での現地活動の評価」「大学での総合的な最終振り返りレポート」「大学での現地活動報告会プレゼンテーション」
7	授業担当者が作成	授業担当者が作成	課題概要は学生指導委員会(初年次教育を担当)が作成。個別の課題だしは個別のクラス担当教員が作成。	授業担当者が作成
8	トリプルジャンプ・ルーブリック(ステップ1・2用の一般的ルーブリック、ステップ3用の課題特殊的ルーブリックの2種類)*	コモンルーブリックを授業担当者に提示。個々の授業担当者に応じてローカライズ。	初年次向けキャリアレポート・ルーブリック*	現地での活動の質の向上のために、現地活動に求められる観点を表した分析的ルーブリック。各観点の重み付けを記載したもの。
9	・シナリオを学生に提示する際に、同時にステップ1・2用ルーブリックも提示する。ワークシート提出時にルーブリックにしたがって自己評価するよう学生に指示するとともに、教員による評価に使用している。 ・ステップ3用のルーブリックはワークシート提出後でステップ3の前に観点のみ学生に提示する。教員による評価に使用している。	基本的に、授業開始時に提示。授業担当者によって異なるが、学生の自己評価、教員による評価において活用している。	・学生には提示せず、学生の自己評価もピア評価もなかった。 ・最初に担当教員によるAoL評価(①問題意識、②対象理解、③結論導出過程)を行い、その後アンケートとヒアリング調査を経て改定評価(①自己分析、②将来希望、③結びつけ)で評価し直し、3名の教員で結果の検証をした。	現地での活動に際し、学生が自己評価(および活動の改善)に活用する(形成的評価)。その際、現地活動に同行している上回生(学生サポーター)がメンターとしてルーブリックを参照する。
10	・ステップ1・2用ルーブリックは、AAC&Uの「問題解決VALUEルーブリック」(松下、2012)も参考に、PBLの学習過程にしたがって6観点を設定した。ステップ3は通常のPBLの学習過程になく、解決策の実行を評価するために、独自に「追加情報の収集」「情報の統合」「共感的態度」「コミュニケーション」の4観点を設定した。 ・レベル数はレポート評価の経験から、両ルーブリックとも4レベルに設定した。長期的ルーブリックとし、記述語に関しては、最高レベルを卒業時に求められるレベルとして記述している。各レベルの差異は、副詞を用いて量的に、あるいは項目を追加するなど数的に表している。	2014年3月開催のFDワークショップで、授業担当者同士が5つのグループに分かれ、コモンルーブリックの試作品(5作品)を作成した。この試作品を基に、大学教育センターにおいて、『山口と世界』コモンルーブリック(案)を作成の上、同年7月開催のコモンルーブリック開発WSIに提示し、策定に向けた意見交換を行った。この意見交換を通して、「コモンルーブリックの規準の記述内容について、初年次教育科目のレベルに適合するよう調整」「実際の運用面の諸課題としての、①グループ評価と個人評価のあり方、②成績評価への活用方法のあり方、③コモンルーブリックを基に、教員個々が使用する際のローカライズのあり方」を考慮することとした。複数回のワークショップを通じた調整作業を経ながら、同年9月上旬には、「発見する」「はぐくむ」「かたちにする」「分かちあう」「振り返る」の5つの基準からなる『山口と世界』コモンルーブリックを策定した。さらに、ルーブリック活用に応じた基本的考え方を整理し、授業担当者に対して提示した。	・元ルーブリック(AoL8分野16項目)を「未来の履歴書」用に落とし込んだVPSキャリアレポート用ルーブリック(3観点*3水準)。 ・AoLルーブリックは大学のミッションに呼応するようにAoL委員会が策定(教授会承認)。 ・AoLルーブリックの5レベルのうち、上位2レベルを除いて3レベルにして、初年次キャリアレポート向けに担当者全員が難なく理解できる用語に改定した。	現地講師の方々への調査から、現地活動で求められる活動の質の観点および記述語を析出・記述。レベルごとの記述語はない。現在、インタビュー調査を進め、観点および記述語の修正を行っている。 AAC&UのVALUE Rubric(たとえば、Problem solving, Civic engagement 等)との対応は今後の課題。
11	・CLQ(Course Learning Questionnaire:授業用学習質問紙)を開発・実施している。	プレゼンテーションによるピア評価やポートフォリオを活用した学生個々のパフォーマンス評価を実施する事例がある。	・CLQ(Course Learning Questionnaire: 授業用学習質問紙)*を実施している。	現地活動の際に振り返りミーティングを行うとともに、「振り返りレポート」を書かせている。
12	・統合された深い知識・理解を評価するために、総括的評価として学期末にペーパーテストを行っている。 ・日々のPBL授業で、問題解決の流れを理解させるとともに、対人関係能力を自己評価させるために、学習振り返りシート*を記載させている。ファシリテータはその結果を見て、学生にコメント・アドバイスを与えている。 ・PBLの評価結果とCLQの結果の関係を分析している。	グループにおけるパフォーマンスと学生個々のパフォーマンスを区別しながら、成績評価に反映できるように努めている。	・レポート評価の結果とCLQの結果の間の関係を分析している。	現地活動の際に振り返りミーティングを行うとともに、「振り返りレポート」を書かせている。その際、ルーブリックを参照するようにしており、より充実した現地活動を作り出す工夫をしている。
13	・評価者3名でワークシートならびにロールプレイを評価し、その結果から評価者間信頼性を分析している。	『山口と世界』の成績評価については、成績分布システムにおいて教員間に公表されており、比較検証するように努めている。	・評価者3名でレポートを評価し、クラス担当が行った元の評価との比較を行った。	「現地講師による評価をもとにした大学での現地活動の評価」は、現地講師に評価シートを渡し、送っていただく。それをもとにした教員による評価は、授業担当者(2~3名程度)が行う。振り返りレポートも、授業担当者(2~3名程度)が行う。活動報告会プレゼンテーションは、授業担当者を含む評価者(5~6名程度)で行う。
14	・ステップ3終了時に、ワークシートの評価結果も含め、トリプルジャンプの評価結果を学生にフィードバックしている。	ポートフォリオを併用しながら、ルーブリックによるパフォーマンス評価結果を学生にフィードバックしている。	・評価結果は今回は検証が後手に回ったが、今後は中間段階での評価実施とフィードバックが可能かどうか検討する見込みである。ただし、初年次教育に盛り込んでいる内容が多くあるため、中間評価の実施は未定。	ルーブリックは、現地での活動の質の改善に活用している。各自が参照するだけでなく、現地での振り返りミーティングの際に確認させている。 全体的な評価については、担当者会議を毎期開催し、授業改善に活用するとともに、現地講師や地域の関係者、学生も含めた「エリアキャンパスもがみ運営会議」での議論に活用している。
15	・トリプルジャンプ受検は、総括的評価であるペーパーテストを受検するための条件としており、トリプルジャンプの評価結果は成績評価に反映されない。	評価結果を成績評価に反映する事例は見られるが、成績評価に確実に反映させる方向性には難しさを感じる教員が相当数存在する。	・今回は評価結果と成績評価の関係は、個別の教員に任せられており、その結果は調査項目に含まれていない。 ・今後は大学が重視するAoLとの関わりがあるため、成績評価とも一定に連動させる必要性を認識している。	直接的に反映させているわけではない。一方で、ルーブリックを参照しながら現地での活動を充実させ、その結果を「現地講師による評価をもとにした教員による評価」や「大学での総合的な最終振り返りレポート」や「大学での現地活動報告会プレゼンテーション」等で確認することで、ルーブリックで表記された学習の質を保証させている。
16	・評価のデザイン・分析…授業担当者と研究協力者 ・評価の実施…授業担当者(全員)、一部、学生も自己評価に参加	・評価のデザイン…授業担当者と大学教育センター ・評価の実施…授業担当者 ・評価の分析…授業担当者と大学教育センター	・改訂はVPS教員へのヒアリングをベースにして学生指導委員会と産業界ニーズ事業担当者で協議して作成。 ・学生レポートの一次評価はクラス教員がAoLルーブリック3項目に基づいて実施し、改定ルーブリックによる評価はクラス教員・学生指導委員会委員・産業界ニーズ事業担当者から3名で実施。	・ルーブリック…授業担当者、地域講師、学生 ・その他の評価…授業担当者、地域の関係者
17	・ワークシート提出時に、ステップ1・2用ルーブリックにより、各観点の到達レベルを自己評価させている。 ・ステップ3終了時に、ワークシートに対する教員の評価と学生自己評価結果を記入したシート*を学生に渡し、自己評価結果が教員の評価と異なった理由、教員による評価結果を踏まえ、現在の到達度と、今後、どのようにしたら問題解決能力を伸ばすことができるかを記述させ、提出させている。	評価課題に関する情報共有者であり、かつ、評価結果のフィードバックを理解できるといった点での関わり	・学生は評価には関わっていない。	・ルーブリック…現地での活動に際して自己評価に活用している。評価基準については、現地講師と大学が求める基準だけでなく、自らが掲げる基準も記入できるようにしている。 ・その他の評価…授業改善アンケートをはじめとした各種機会を通して、学生の声を収集・反映させている。「エリアキャンパスもがみ運営会議」での学生の意見も同様。
18	・ワークシート評価前、ロールプレイ評価前に評価者が集まり、評価基準について話し合っている(キャリアレーション)。	ルーブリックを開発・試行するためのワークショップを授業担当者レベルで行った後、その成果報告を兼ねたワークショップを学内外公開形式で行った。	・評価基準やルーブリックに記述する用語について、担当教員すべてにアンケートとヒアリング調査を実施し、意見伺いを実施可能性への了解を取り付けた。	ルーブリックでの評価については、現地講師の方々との意見交換や研修会を通して改善を図っている。
19	・教員の評価負担が大きい。	コモンルーブリックを開発し、その実施を浸透させることには、要する時間と負担が大きい。	・教員にとっての評価負担は若干増えるが許容範囲内であり、また評価の信頼性が向上したため、この面での問題はあまりなさそうである。 ・ただし、教員ごとに課題内容と提示の仕方が細かいところで異なっているため、教員間の比較が困難である。	「現地講師による評価をもとにした大学での現地活動の評価」に際する現地講師による評価は、次の2点の課題を抱える。 ①現地講師が学生(10名程度)の活動の詳細をしっかりと見て評価することが難しい。 ②学生が自己評価に活用する評価基準を、いつ学生に告知すべきかについて、学生から多様な意見がある。
20	・PBL授業を行っている歯学科にもトリプルジャンプを拡大し、評価用教材の作成と評価者養成を行う。 ・トリプルジャンプの評価結果を成績評価に反映する方法を検討する。 ・教員の評価負担軽減の一助とするために、ステップ1・2をウェブ上で実施する電子システム「eステップス(仮称)」を開発する。	ルーブリックを通じた授業担当者間の対話は非常に重要かつ有意義であるが、その一方で、大学全体として組織的にルーブリックを浸透させる方策を考えたい。	・評価のためだけでなく、能力育成のためのルーブリックの戦略的な活用方法を検討する。 ・本義である初年次教育の成果が、その後どうなっていくのかを継続的に調査する。	・現地講師との意見交換を通じたルーブリックの精緻化。 ・それを通じた現地での現地講師の学生指導の改善。 ・既存のもの(たとえば、AAU&CのVALUE Rubric)との整合性の検討。 ・学生への告知時期の検討。 ・レベルの記述語表記。 ・大学でのレポートや報告会プレゼンテーションのルーブリック作成。
21	学会発表、論文、単行本の一部、講演の形で公開(一部公開済)	既に各種学会発表、学会誌・学内紀要等での論文掲載を行っている。	学会発表、論文の形で公開(一部実施済み)	学会発表等。
22	・一部の学生から、トリプルジャンプの評価結果も成績に加えてほしいとの要望がある。	ルーブリックの作成・活用そのものが授業設計の見直しなどを喚起し、FDとしての効果がある。	・組織内での手続きやこれに要する時間など(なかなかこちらで思い描く理想的なカタチでは展開しません…)	現地講師との意見交換によるルーブリック開発・改善が、学生の現地活動の質の向上につながることで、さらには、現地の課題発見やニーズ開発につながることで、現地(地域社会)の満足度の向上および持続的な取組の展開につながる。現地活動の質の向上や、現地の課題発見・ニーズ開発に寄与しているかどうか、実践研究を重ねていくことが必要と考える。